木下杢太郎全集

第六巻

木下杢太郎全集 第六巻　第十回配本（全二十四巻）

一九八二年二月一八日　発行

定価四二〇〇円

著者　太田正雄

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三秀舎　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1982　Printed in Japan

目　次

青年の心理……一
小さい村の葬式……一三
「一度は通る道だ」(Une caricature.)……三五
薔薇花を持つた老人……九九
寶物拜觀……一〇三
少年の死……一二五
油　壺……一七一
一群の人々……一九一
船室の夜……二四七
新時代……二九九
三度目の試驗……三三九

崑崙山……三七七
雪……三九一
電鈴の釦……四一三
二少年……四三三
龍太郎……四四五
古都のまぼろし……四五一
口腹の小説……四七九
安土城記……五一三
後記……五五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

青年の心理

日出前の事である。黑き村落はまだ濕むが如き南國の星天の下に靜かに眠つて居た。大きい廻轉をなした北斗星の群は殊に明かに沖天に座して他の無數の星群と共に生物であるかのやうに鮮かに見られた。一月一日の曉である。この時彼は海に面せる二階の戸を開けてこの天象を見、忽ち一種の崇高の感に打たれた。突然けたたましく目醒時計が鳴り始めた。彼は舌打をしながら鐘を止めた。丁度五時半の所であつた。

海は黑く、恰も平かに凝つた焰でもあるかのやうに沈默して居た。少くとも彼はこの大きい一自然をそのやうに見たのである。實に靜かな曉である。もう一つの物音も聞えなくなつた。唯遠からぬ海の渚にうち寄する波の響らしいものが時時聞かれる許りであつた。海と空との境のところがほんのりと白かつた。あとは土耳古玉のやうな光輝ある大きい穹窿と、それから暗い陸の家並である。

「われも今年は十九になれり。」とさう文章語で彼は考へた。次に「地球は其軌道を一回轉するの務を完成して更に新しく運動し始めたり。われ等も新しく務めに就かざる可からず。」と考へ續

けた。人は居ないけれども何となく恥を感ずるやうに初めは小聲で「去年は迷なりき、猶豫なりき、停滯なりき、今年は道を開かざる可からず、道を突進せざる可からず。實に一年の計は元日にあり。われ之を爲さざる可からず。」と、終にはやや感激して聲高に海の方に呼んだ。海は依然として黑く、而かも何等かの威力を以て人に迫るやうに見えた。そして空はまた空で一入星の光が增したやうに思はれた。彼は段段興奮して來て、この美しい大きもの（段段さういふ風な觀念が起り始めた。）と自分との間に何等かの交涉が付かなければならない。と、尤もそれほどまでも明かに思惟はしなかつたが、非常に物足りないやうな、其癖有り難いやうな氣がして、彼は兩方の掌を合はした。そして目上の人に辭義するやうに海の方を向いて頭を下げた。しかしこの行爲が自分にも滑稽に思はれて來た。

少し補足していふが彼は物を考へるに劇的の想像の力を藉りなければ出來なかつた。つまり純粹に抽象的に思惟する事が出來ない性であつた。だからして同時に外象は凡て繪畫的に彼の思索の中心を襲うた。生得（うまれつき）と年齡との關係もあるが殊に彼は想像力の逞しい青年であつた。であるからこの海とか空とか、またまだ戸を閉してゐる人家とかがいつかもう多少其本來の相（すがた）を變じて彼の考の中に入つて來たのである。卽ち同時に彼は一種の自己暗指を得た人の如くになつた。開いた耳目で外象を見てゐながら、彼の感じてゐる世界は全く原（もと）の世界とは變つたものであつた。丁度その時窓の

下で家で戸を開けたものがある。三十ばかりの婦が寢衣のままで表の雨戸を開けたさまが活動寫眞のやうに見られた。婦は戸をあけるとすぐ表へ出た。表へ出るとすぐ空を見上げたのである。この一列の無言の行爲は彼に非常の感激を與へた。「かうあらねばならぬのである。これが自然の行き方である。」かう彼は思つた。すると今度小さい子供が一人出て來た。小走りに走つて井戸の方に行つた。最前の婦が之を叱するやうな姿勢をした。卽ち一歩踏み出すやうに上體を前屈して、そして右の手で一種個有の運動をした。すると子供が足を高く擧げて、躍る人のやうに不規則な歩行をし始めた。でこの運動は彼、觀察者にはまたまつたく新しい世界を開いたのである。彼には一人の幼兒の運動が約三十人許の人の運動に見えた。人人は皆斑らな着物を著てゐるのである。その中には馬と犬と鷄とが雜つて居た。そしてまた白頭の老人が厚いどてらを著て雜つて居つた。この若い子息の夫婦も雜つて居つた。それが海の渚に立つてそして大な日の出と共に躍り出すのである。—而してそれが實際の自然でなければならないと彼は思つたのである。段段明るくなつてくる光の下に彼自身次のやうな事を紙の上に書いた。固より直接の思想と其發表との間には幾段かの道程があるからその時の彼の考を之によつて知る事は出來ない。けれどもその時の彼自身は反つてよくその文中に見る事が出來る。

「み空白みて星の光あせ朝風ゆるく流れ行く。眠は醒めぬ。戸を開けて幼き男の子出てゆきぬ。

濱邊に立ちて、ねてねて待ちしお正月を樂しみ、其歳のまた一つ加はりて、やがて父の如く大きくなる可きを喜ぶ。—戸はまた開きぬ。靜やかに若き少女出てぬ。ほほゑみつつ獨りごちてゆく。愁ひは去年の夢なれや、今年もついで來む年も樂しみあれ、ああわが望も遂げられよかし。—戸はまた開きぬ。白髮の老翁子等夫婦に手を引かれ出づ。顧みていふ。汝等にはよく働きて、わが孫も恙なく生ひ立ちぬ。わが務も幸ひに終りぬ。—朝日水を離る。瀲灩たる水光。—おお働は汝等が生命なり、之によりて成ひ立つ可し。之によりて愛を得可し。之によりて樂しく一生を終る可し。—波うち風起り、鳥飛び、犬走り、親子孫兄弟跳りうたふ。—」

かう書いて彼の内の世界が幾分なりと外に出たのを見て、彼は滿足よりも寧ろ失望を得たのである。卽ち一種の褻瀆の感を抱いたのである。彼は紙を破らうと思つたけれども、然しそれをば敢てしなかつた。けれども今迄犯す可からざる實際であるといふやうに感じた心の世界が、何か餘計な洒落に過ぎなかつたらしいといふ不安と不快とを消す事が出來なかつた。

今度は力めて自らその氣になる積りで兩手を合はせて見た。そして空と海とを諦視して見た。然し最前の感激はもう再び戻つて來なかつた。まだそこここに淡い色の星が見られた。然しそれは通常の天體以外に何でもなかつたのであつた。陸の家家も大半は戸を開けた。それで彼は階段を下つて戸の外に顏を洗ひに出た。臺所の大きい圍爐裏のそばに少い四人の下男達は面白さうに話をしな

がら餅を燒いてをつた。少時その仲間には入つてゐたが再び二階へ登つて、まだ多少溫味の殘つてゐる臥床に入つていつかまた眠つたのであつた。

少しとろとろとしたかと思ふ間に半作といふ丁稚が彼を起しに來た。で彼はまた下の男の群に雜つて雜煮を食べた。圍爐裏には炭の火が熱よく起つて居て黑い大な鐵瓶が其上に懸けられてあつた。この男たちはこの家の多い人數の朝食ふ可き餅を燒くのである。鷄がいかにも親しげに呼ぶ人のやうに鳴きながらもう明け放れた戸の外から入つて來た。そこで釣られた洋燈を外した。そこへ下女たちも起きて來て戸を明けなどした。

つひ二三年前まではかう元日に早く起きて店の人達と一緒に節を祝ふと云ふ事が如何に樂しい事であつたか知れはしない。强いて今其氣にならうと思つてもなれはしない。もとは爭つて餅の數を多く食べた。さういふ事も今は出來ない。それで何となく昔の少年時代が羨ましいと云ふやうな不滿の氣を起しながら群を離れて又一人物を考ふ可く二階へ登つた。

「さうだ。今朝はお宮へ行つて見よう。あの森の暗い奧でも一度考へて見よう。事によると考が解けるかも知れないから、」とさう思つて再び急いで階段を下つた。

今日はどうしても定りを着けなければならない。とさう云ふ決心で霜解けの道を登つて行つた。

もう餘程高く登つた日だけれども、赤い枯葉の灌木や枯草の山に射す日差はえも云はれず美しい。それから何となき地の線にもあるか無きかの畔の草の紅にも程よく溫い朝の光が滿ちて、殊に黄い稻束を黄金に染むる鮮かな日光は一種の限なき愉悅の心を起させるのであつた。それらの自然の刺戟が始終彼の官能を捕へて、彼の望む「眞面目の考察」といふものを妨げたのである。それに海や空、蜜柑畠、また生命のあるやうな一群の人家、それらの眺望はいよいよ彼の注意を亂した。で、いまいましげに舌打をしながら彼は神社の暗い坂を登つて行つた。

神社の境内にはまだ誰も居なかつた。それでまた彼は「太陽の崇拜」(さう云ふ言葉を作つて一年彼はよく太陽に御辭義をするまねをした)をしてそれから今日考ふ可き題目を考へ始めた。

秩序もなくいろいろの事が心頭に蜂起し始めた。一層畫工になつてしまはうか。(この考へに對しては、常に彼は羞恥の念を抱いた。)このまま高等學校を休めようか。それとも人を診ない醫者にならうか。……かう云ふ風な幾つかの思想が少時彼を惱ましたが、今日は決してそれらの事に決斷を與へる必要はない。今日は唯この休暇に旅行しようか、それとも休めようか。唯この先決問題を決すれば可いと云ふ事までに歸着した。

一體この旅行と云ふ事も彼の考へでは決して家常茶飯の事ではない。極めて重大な意義のある事であつた。天—山、その山のどこか人の居ないやうな洞で考察したら、何かてきぱきした果斷が彼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

に生ずるに相違ないといふ一種の信仰と名附く可きものを抱いて居たからである。どうしてさういふ信仰が來たかといふに前の年の十二月の二十六日の夜に妙な夢を見て、それが力強い暗指を彼に與へたからであつた。

さほど遠からぬ高山の谷間(たにあひ)の里(さと)—さう云ふ景色がありありと夢の中に現出したのである。寂しい百姓家が荒い急流に沿うて建てられてある。夜は風が強くて、狹い山間の蒼穹を被ふ雲は實に物凄い。けれども朝になると眞赤なまん圓い日輪が高い峰の松並木の後ろから昇つて、紫の曉氣で閉された谷の村落を照し始める。その時暗い森の奥で冥想して居た彼に忽然と一種の暗示が働いて、未だ嘗つて知らなかつた新しい力を得た、とさう云ふ原始的な且宗教的の心持を形象的に夢の中で經驗したのであつた、「我心の樣ほど怪しきはなし、何を欲し何を憂ひては斯く戚戚たる。其定めんとし、其考へむと欲する所の對象は何ぞや。唯空しく思ひ煩ふのみ。……

「我は終日何事かを考へむと欲して階段を上り下りつしつ。されどわれ机に向ふや堪へ難き苦痛も、忍び難き不平もあらざりき。げに故里の我を待つは寛なりき。子にあまき母の如くにして更に溫なりき。われ不孝の兒はこの甘き抱擁になれては、反つて之に背かむとす。然りわれは故鄕といふものに對して疑を懷けるなり。われの故鄕に於けるや、風なき池の隅に落ちたる木の葉の如し。滯留久しければいよいよ腐り易し。些の發展を見る事なからむ。ああ去らざる可からず。去らざる

可からず。

「われは能働の性にあらずして被働の性なりき。人の能辯乃至風の聲は我を動かし能ひき。われは他の者を動かし能はざるなり。されば階上八疊の籠居は、休むに似たる考の外何事をも持ち來すことなかりき。狹き階上を出でざる可からず。出でて自然力の微なる幾分を呼吸せざる可からず。されど故郷の母の如き山川はあまりにわれに寛なりき。ああ去らざる可からず、去らざる可からず—。

「……夢去りたる後は依然として我は階上に臥せりき。摑み得たりと信ぜし新力は何處に尋ねて之を得む。我頭は澄まず、我心は依然として停滯す。ああ一度靜座すれば萬有の精靈の來って彼を圍む大思索家の羨ましさよ。われは人生戰場の落伍卒なり。ああ去らざる可からず、去らざる可からず。然れども去らば果して我求むる所のものを捕へ得可きか。

「去らざれば得ず、去るも得ず。ああ如何にせば之を求め得む、われ果してわが進む可き前途を確定し得可きか。而して之を定め得ざるはわれ一人にあらで凡ての人も始めは然るなるか……」

その翌くる日の日記にさう記されてあつた。—

で兎に角その日は、來る三日の日に家を辭して四五日高山の旅をするといふ事だけを確定して神社の森を出た。その時拜殿の前には、もう幾人の漁夫が來て、賽錢を投げて居た。

其夜彼はその伯父に當る、やや有福な寺の和尚を尋ねた。そして明瞭には言はなかつたけれども、兎に角何か考へたくなつたから旅行をするといふ事を告げ、何か爲めになる本があれば貸してくれと云つた。住持は子飼からの坊主ではない。もと高等中學までやつた人であるが肺病になつて、其上佛學と座禪とに凝つて到頭坊主になつた人である。もう五十に近い年齡で、昔の情熱はどこかへ消えて極めて單純冷澹な人である。今は子供も一人ある。「お前も何か考へるやうな年になつたかな。」と云ひながら、譯本のトルストイの『我懺悔』といふ本と『十善法語』と、それから氣が向いたら讀んで見ろと云つて雁皮紙へ刷つて一杯朱で書き入れをした『大乘起信論』とを貸してくれた。その時彼は始めて釋迦の事、またその前の波羅門教徒の生活の話などを聞かされた。歸りしなに「お前が學校を休して畫工になりたいと云つて寄越した相でお袋さんは大へん心配してゐたつたが、もうさういふ氣はないのかえ。」何氣なく和尚が訊いた。彼はまるで五寸釘を心臟に打たれたやうな氣がして、はつと筋肉を收縮させた。そして心にもない僞を言つた。「もうそんな事は思つて居ない。」

借りた本を小脇に抱へて、暗い寺の道をとぼとぼと歩いて歸りながら、今云つた僞の言葉を恥ぢた。

「人の進み行く路、其前方は霧の海なりや、其彼の星の輝、達人は其炳乎たるを認め得たりしや、彼の勝利者、成功者は始めより其煌煌たる光を目指して事をなしたるなるか。其輝きは實なるか。假なるか。ああ我は何の職業のわれに適し、何れの道のわれに成功を與ふるかを豫知し得べきか。勉むれば能く是等の事を解き得可きか。解きて而して達し得可きか。

「上の考は人橋梁なき江流に臨み、徒にわが能く水を游ぎ横り得るや否やを思ひ煩ふに似たり。唯水の逆卷くを見、其色の深碧なるを見て恐るるに同じ。先づ己の力の如何程なるかを測らざれば其達すると否とは永久に測り得る事なからむ。然らば我の果して何物にして、わが力の幾何なるかを知り得可きか。

それもまた解し難し。我の何物なりやといふ問ひはわが行く可き道の何なりやと問ふの裏なればなり。またわが力の幾何なるやに關しては、往往我の人に超えたりと思ふことあり。かかる時は我は揚揚たり。時としてわれの甚だ人に劣るを知ることあり。かかる時は戚戚たり。

「かく徒に自問自答し煩悶するも、遂にわれの疑は晴る可くもあらず。寧ろ我は今の我の心の何を望み、何を厭ふかを直視せん。今我父兄は古き藥舗の子としてのわれを藥劑師か乃至醫師となさむと欲せり。われは高等學校の第三部一年の生徒たり。然るにわが心は之を喜ばず。醫家となるがいやの心持す。而してわれは之に反して洋畫(か然らざれば文學にても可し)をわが職業に選ばんと

欲す。此道が人間の、少くともわれの取る可き道なりと云ふが如き氣持す。唯われは、我に斯才ありや否やを疑ふなり。われは屢氣持といふ言葉を用ゐたり。何故に然るか。甚だ輕浮の言ひ草には非ざるか。(然し實際はわれ自身が輕浮なる天稟なるやも知れず。) されどもわれは氣持といふ外に言ふ術なきなり。何故といふにわれは今殆んど相等しき兩つの力の間に迷ひてあればなり。十一月の末のある土曜日の夕、わが友山本に誓ひたる「此休暇中に於てするわが生涯の第一回の考察」の重大なる對象となる可きものが上述の問題にして、氣持といふ以上に闡明したる事なければなり。」

正月二日の日の朝のうちにこんな日記をかいた。晝頃また二階へ登つて物を考へてゐると、下の隣の方で急に三味線の聲が聞こえた。

「ああありや浮いた浮いた。」といふ賑かな女の肉聲が聞えた。それからてんてん、てんてんといふ絃の聲がして、その合ひ間合ひ間に人の笑ふ聲がした。家が消防組の組合と關係してその若衆達を招いたのであつた。

そんな物音で考察が妨げられて非常にいまいましくなつて、正月から酒を飲むと云ふ事は非常な惡事だと考へたが、人聲も靜まつて、ひとり緩かに流れてゆく音曲には耳を傾けないわけには行かなかつた。仕方なしに昨夜借りて來た『十善法語』を出して讀んだけれども一向面白くなかつた。

それから夕方になつて、日下の暗くなる頃を見計らつて、毛布の襟卷を首に卷いて家を出て行つ

た。

やや廣い川が海に注がうとする所である。幾本かの小松が堤の上に生えて、五つ六つの稻叢がある。冬とは云ひながら、なんとなく溫味のある南國の海の潮風が靜かに耳許に音訪れてきて、雲の中の月は水面にほのかの銀光を引き、肅(しぬ)やかな多少ロマンチツシユな氣雰の世界を作り出してゐた。

(Jan. 1912)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.